

開拓の群像(二)

若佐の夜明けに生きた男
北の大地に夢をたくして

大野 弘



明治42年大野弘先生と寺小屋式学校の生徒

昭和三五年、岐阜県に「御母衣ダム」が完成した。このダムの底に深く沈み、眠っている村がある。荘川村がそれである。

明治の三九年、若佐の市街地、十字街の現在の山口忠雄氏宅の箇所、荘川村から、最初に入植した大野弘は、当時、貧しさのどん底にあった、故郷の里人を募って、五〇戸もの団体移民を道庁に申請し、朔北の未開の地に再起の夢をたくして、佐呂間をめざした。

荘川村村史により、当時の大野弘の故郷を探ってみたい。

「本村では、明治の終わりから大正時代にかけて入口の増加がめだち、さらに食料不足に喘いでいた。農家ではトチモチ（トチの木の実）草モチ、カスモチ等をこしらえて食べていた。それらは決してうまいというものではなく、不足がちな稗飯を補充するものであった。食料不足からくる栄養不良のため、うまれてから成人に達するまでに多くの子供達は死んだ。米と餅などは上等のもので、盆と正月以外には食べられない有り様だった。明治時代の食料事情は、太平洋戦争の食料不足など比べものにならないと、多くの古老達は、述懐している。」とある。

この地方は、平地と呼ぶ程の平地はなく、谷間の傾斜地であったから、木を切り倒した跡を火入れをして焼き払い、その灰を肥料に大木の根っこを避けては、鍬でおこした箇所にはヒエの種を蒔き、収穫したヒエ飯主食地帯であった。米の飯など拌みたくてもお目にか

かれないばかりか、一〇年に一度位必ずおそってくる大区作のとき、なぜが山の傾斜一面に繁茂するクマザザの根元から、か細い稲穂の様なものが見れて、貧弱な実をむすび、これを飛驒では野麦といい、里人は、この実を取って粉にして、ダンゴを作りかろうじて飢えをしのいでいたほどの貧しい里であった。

江戸時代から信州地方は生糸の生産地であったが、明治になり、鎖国時代から文明開化の大きな時代の流れの中で、外資取得の貿易の花形であったのが、生糸の生産輸出であった。現代の後進国援助など無い当時の世界の後進国であった日本にとって生糸の貿易収入は富国強兵のための無くてはならない産業で、生糸生産は国策としても、重要な地位を占めて、生糸の製糸工場が、信州の諏訪湖に注ぐ天竜川の流れを利用した水車動力により、乱立していた。

飛驒（岐阜県）と信州（長野県）の県境には三〇〇m級の檜ヶ岳、穂高岳、焼岳、乗鞍岳が、連なる北アルプスが横たわり、通行をさまたげていた。

昭和九年、高山線の鉄路が開通するまで、岐阜と信州をつなぐ通行路は、一六七二メートルの野麦峠しかなかった。

この峠を徒歩でこえて飛驒の貧農の娘達は製糸工場の工女として、前金で縛られて、信州に出稼ぎに出るのが一般であった。

人手の足りない製糸工場は、飛驒の部落毎に工女を募り、一、二、三才の子供達も、野麦

峠を越えた。適性試験もなく、ともかく頭数として集められた工女達の中には、作業に不適な子供達いたが、腕のいい工女は、当時、百姓の一年分ものあげ金をもって、一二月の末、雪の野麦峠をこえて帰ってくる者もいた反面、過労の為、結核等を患い、背おわれて、峠を越え、自宅の納屋の暗がりて死んでいく哀れな娘も大勢いた。

これが、女工哀史として、後々まで語りつがれた、製糸工女を生んだ飛驒地方の現状であった。

糸をとらぬかとらぬか女子

糸をとらなきや養着せる

一日一四時間以上の作業時間、決して楽な仕事ではなく、まして、往き帰りの酷しい強行軍をしても、里での百姓生活よりは、まじ、だったという泣けるに泣けない、飛驒の農民の貧しい生活を歌った、糸ひき工女の歌である。

大野弘が、北海道移民熱にあったように、村民の団体北海道移民に奔走したのには、野麦峠を越えていく娘達の貧しい境遇の飛驒の山陰、猫の額ほどの傾斜地にへばりつき、来る年も来る年も焼き畑農業でヒエ主食の生活からの脱出先を拡大な北海道の地にもとめたからにはかならない。

当時の北海道開拓は、そうした状況下の地域に住むものには、将来に希望を抱かせる夢多き事であった。貧しい部落の同胞と手を携

えて夢の実現に挑戦したいと言うおもいが、日増しに膨らんでいった。

大野弘が、北海道移民を決意した明治末期には、莊川村だけで、次のような数字の移民が行われている。

明治三八年 一二七人

明治三九年 一三八人

明治四〇年 一三一人

明治四一年 五〇人

このように、移民の数が激増したには、飛驒地方の農民の過酷な悲しい実現があつての事である。

大野弘は村の中の資産家、大野宗兵衛の一子として生まれ、田畑山林も所有する裕福な家庭でそだった。父の宗兵衛は先祖からの資産を手堅くまもり、何かの都合で他人が財産を処分するときなどは足元をみて、値切る様な姑息なことは一切しないで、相当なる、金をだして助ける程の徳を持つ人であった。

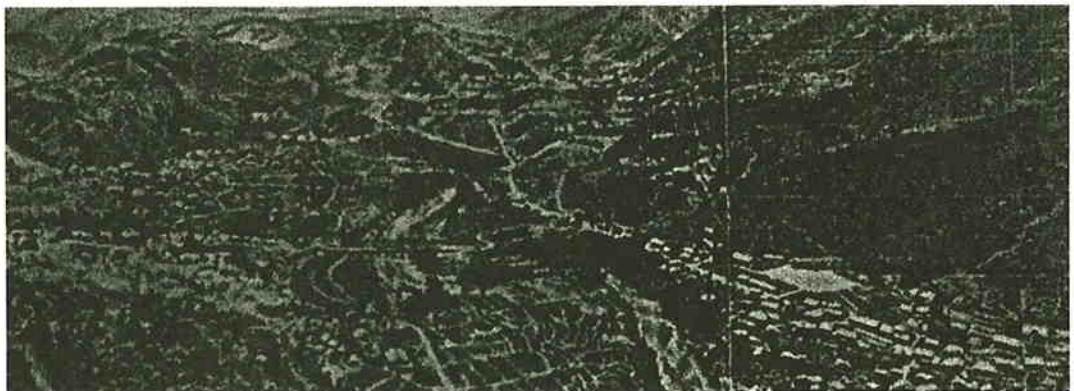
宗兵衛は息子弘の将来を考え、当時としてはなかなかできなかった上級学校に進学させたのであった。

明治三一年新測地区から推挙され弘は村会議員に当選した。未だ二〇代であった。

公職についてから莊川村の職員不足と人材不足から懇願されて、登記所の事務職につくことになり、農業は家族任せとなった。

役場内にあつた登記所の仕事をとうして、時代を先取りする目が開けていった。

そして自分の故郷、莊川村が日本の中でも、



岐阜県大野郡莊川村水没地区水没前の全景

悲惨な地域であることを認識し、何とかしなければと言う思いとそれを自分がしなければと言う使命感にとりつかれていったのである。北海道移民の大きな潮流が生まれつつあった。

弘は父宗兵衛に「私は、莊川村を助けるために、政府が盛んに呼びかけている北海道開拓に村人と共に参加しようとおもう、その事で、村の人口が減り残った人の耕地も増えるし、北海道に移住した者も、このまま、この地で貧しさに喘ぐ生活から脱出できると私は信じている。自分についてくる人達をつれて移住することを決心した」と相談を持ちかけると宗兵衛は驚いて「弘、なにをとんでもない事を言うんだ、先祖様から受け継いだこれだけの田畑山林があって、今お前は役場の登記所の仕事をしながら収入役の仕事もしている。莊川村では居なくてはならない大事な人になっているのだし、わしの老い先のことも考えて思い止まってくれ」と泣かぬばかりに説得したという。

しかし弘の決意はかたく「今誰かが先立ちとなって莊川村の人達を移民させなければ、村は自滅してしまふ、断固として村人を北海道に移民させます。」と譲らなかつたと娘の「いと」が語っている。

明治三十八年大野弘が、同調者の山下辰次郎を伴って、北海道の下見視察に來道したのは、北海道とはいえ真夏の暑い盛りであった。

二人は、何箇所かの先住の開拓地を訪れ、その状況をみて、莊川村の移民の成功に確信

を抱き、その足で道庁をおとずれ移民先の選定を願ひ出た。移民地はサロマベツ原野ブシユイと決定した。

当時のサロマベツ原野への入植の道筋は、馬籠で美深を出発、名寄經由で湧別からワツカの砂州を渡り、トウフツ、川口、中佐呂間の栄駅通に辿り着き、目的地にはいった近藤農場の人達、現在の国道三九号線の中央道路を辿つた大野団体と、およそ二通りの道筋があった。若佐郷土史「わかさの人々」にその大野団体の入植の様子が、入植者杉山甚助の話として、姪の夫、山下寿一に書かせた詳しい記述が掲載されている。

「杉山甚助の話」によると、

大野弘は北海道の下見視察に來道したとき、隣の在所から愛別に入植していた杉下と言う人を頼つて來た。その時、当時の現地を見て団体を連れて北海道に來ると決心したのでろう。山下辰次郎（山下寿一の父）を愛別に残して、移住者募集に莊川に一回戻つた。

明治三十九年移住者もきまつて、二月二〇日故郷莊川村を出発する事になったが、移住を中止する者や、都合で遅れる者も出て、二月二〇日に出発したのは八戸だった。

三月三日昨年から來ていた、山下辰次郎の待つている愛別に到着した。若佐の現地に乗り込んでいく支度などしながら、雪解け間近になる四月六日まで一ヶ月程愛別の人達お世話になつていて、愛別を出発した。

上川まで馬籠で來たが、上川からは馬籠も通つていなかったのので、全員徒歩で荒雪を踏みわけあるいた。白滝の峠（北見峠）を越えての強行軍であつたから大変な苦勞であつた。駅通から駅通と、朝一時頃起きて雪がしばらく固雪になったのを見計らつて歩き、太陽が朝になつて昇り、雪が解けて足がぬかるようになるまでは、次の駅通に到着するようにと歩いたがなかなかおもうようには事は運ばず苦勞つづきだつた。

四月一二日五号駅通、遠藤藤太郎宅へ着いた。現在の留辺蘂町瑞穂だ。

四月 三日はゆっくり一日遠藤さんところで休んで、一四日大野夫妻、山下夫妻、杉山、三島、牧、荒川の二〇名でわかさに乗り込んだ。

この一〇名はその日若佐で簡単な着手小屋を建てつつもりだつた。

丁度現在の若佐市街中心地だが、大木ばかりで小屋を造る手頃な細い木がなく探すに大変な苦勞をした。男は木の小屋材集めをし、女たちは茅を刈り集めた。

幸いなことは、茅がかなり生えていてくれた事だ。釘も針金も無い、縛る縄も無いというところで小屋を造るのだから、大変だつた。オヒョウの木皮で縄にしたらと思つて探したがヤチダモばかりでオヒョウもない。とうとう仕方なく柳の木皮をむいて縄の代用にして使つた。

小屋は三角の坪み小屋の簡単なものだつた

がその日は出来なかった。日帰りの予定が小屋が完成しないため、野宿して明日また小屋掛けをする事にした。食料は牧タヨが麦を少し持ってきていたのを皆で分けて食べることにして、その日五号駅通に帰ったのは、三島、荒川、牧タヨ三人だったかな。

熊が出ては大変だとおもって焚き火を大きく焚いて、大野、山下親子は作りかけの小屋に寝たが、杉山は、若佐の道路を造るとき何年前に伐ったのだろう、倒れている大きな檜の木に茅を立て掛けてねた。

夜中に何か騒ぐ声があるので、茅の間から首を出して見たら雪が降っていた。

疲れて寝たので何も知らずポーツとしていたら、冷たい雪が落ちてきていっぺんに目が覚めた。見ると、昨日つくりかけた小屋が降った大雪でつぶれて大騒ぎなのだ。子供が驚いたのか泣いている。大野団長は大声で、「北海道に来たからには、これぐらいの事を恐れていたら、これから開拓は出来ないぞ、元氣を出せ」と皆を励ましていた。

ふと焚き火を見ると、あれだけ大きな木を沢山燃やしていたのに、降る雪でもって消えかけていた。その焚き火をけすまいと、日に勢いつけさせようとかまっていたら、大木の枝に積もっていた雪が焚き火に落ちてきて火が消える。今でこそ笑って話せるが、この時の自分の気持ちは、若かったけれど、これからどうなっていくのだろうと複雑な心になった。山下のかかは百姓していたからともかく

大野のおっかは働かなくとも良い家の生まれで労働なんか北海道に来るまでしたこと無い人だから、その上目的地の現地に来たとたん、この有り様、泣きたい気持ちだ

「つたろう」杉山甚助の話は食料確保の話、現金収入の話と次々と開拓当時の状態を彷彿させてくれる興味深い話ばかりである。

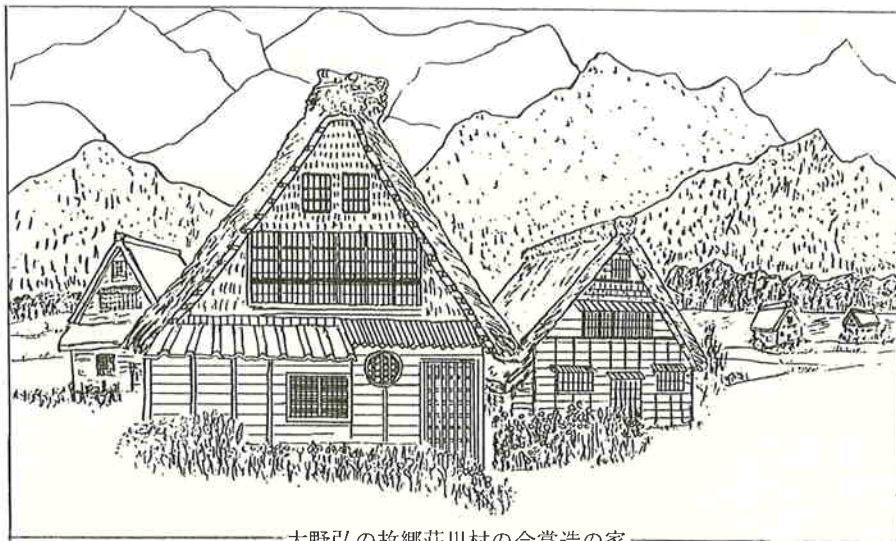
大野弘を語るもうひとりの格好の語り部がいた。父大野弘と一緒に入植した、娘いこの話を書き取った山下寿一の記述が、これも「わかさの人々」に掲載されているので、併せて引用させてもらおう。

「父弘は、北海道の下見を終えて帰郷して、父母に北海道移住の決心を打ち明けたら、父母は驚いて、絶対に北海道に行くなど反対された。父弘は莊川村に在りせば、何一つ心配なく楽な生活が出来る和父母から幾度も言われたが、父弘の決意は、固かった。

北海道に行けば一戸に対して、五町歩の土地が与えられ、開墾に成功したら、莊川村の百姓と比較にならない様な営農が出来る。

莊川村の若者の分家する者に

も北海道移住をさせるべきだ。新天地を北海道へと、同志の移住者を募集して父母の反対を押し切って、自ら団体長となって、父母の



大野弘の故郷莊川村の合掌造の家
1家族が多い家族では5・60人も居たのがあったという

有りし日頃の
大野弘故郷想像図

を故郷に残して武士に入ったのです。「父さんは、自分のことより、貧しい人達がどうすれば、よい生活が出来るだろうか、と考え北海道にきたのでは無いだろうか・・・」

祖父の宗兵衛が、出発の近ずいたある日、いと、お前もわたしを捨てて北海道へいくのか、じいちゃんはお前たちと一緒に暮らしたい、この大野家の財産はお前にやろうと思つて、楽しみにして働いて守つてきた。

熊の出るような北海道に行かなくとも良いのに、と言つて涙をポロポロ流された。今でもその時の祖父の姿が目に見えるようだよ」九三才のいとは、当時の状況を思い出して愁しげに話してくれ、口をとじた。

と山下寿一は書いている。

大野弘が、使命感とも言える夢に燃えて武士にやつて来たとき三〇才の半ばであった。故郷に父母をのこして、心残りが無いわけではなかつたろう。肉親の悲しい別れをして思いを断ち切つて開拓に情熱を傾けた大野弘を支えていたのは娘いと言うように、崇高ともいえる郷土愛と同胞愛にねざしていたからに違いない。しかし、その思いも通じなかつたのか数日後には、数人の脱落者をだすはめになる。

杉山甚助話の続きである。着手小屋造りの夜大雪で、つくりかけの小屋がつぶれ、惨めな朝を向かえた大野弘たちは・・・

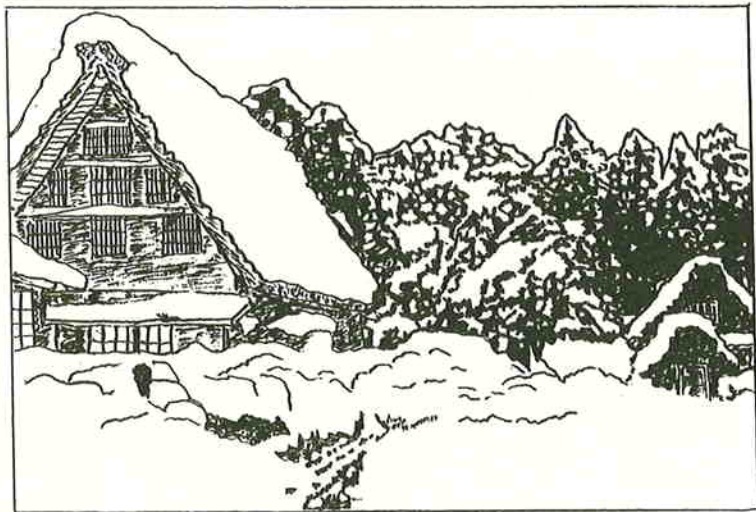
「翌一五日、牧が、食料を持つてくる約束だつたのが、大雪が降つたので、小屋造りが

出来ないもので、五号駅通まで帰ることにした。道路といつても、人通りが無く、自分達が来るまでにすっかり熊笹や雑草が物凄く茂つていた。そこに昨夜の大雪、四月に降る雪は重くて歩きずらく、腰から下はびっしりと濡れた。男は先頭歩きを交代しながら女、子供を後にして瑞穂の駅通を目指してお互いものも言わずに黙々と歩いた。

ふと、前方から黒いけもの様なものがこちらに向かつてくるではないか、一瞬、「熊だあ」全員の顔色が変わつた。何処か隠れる所はないかと辺りを見ると、橋があつた。その橋は後で判つた

のだが敷島橋よ、橋の下に隠れようと婦女子等を橋の下に入れて前方のけだものを眺めていたら、益々ちかづいてくる。よく見ると馬だつた。中島次郎松が、一同の安否をきずつて駅通から馬を借りて迎えに来てくれたのだつた。皆そろつて胸をなげ下ろしたなあ、恐ろしいと震えていたのが、難儀しているときの救いの熊でなく馬よ、婦女子を馬橋に乗せて五号の駅通に着いた。家と言ふものの有りがたさをこの時つくづく感じたなあ。

この朝は、朝食も十分に食べていなかったのので、駅通に着けば十分に飯が食べられると思つていたのに、麦も米も品切れで御飯は無く中長の豆が塩で煮てあつた。



庄川村冬景色川尻氏の本よりトレス

その豆の美味しかったことといつたら忘れられないなあ。宿の主人が雪が降つたので、食料が届かないと言つて、稲黍を掲げば荒黍のままのが有るからといわれたので、白で五人で交代しながら稲黍を精白してやつと御飯らしいものが食べられた。

翌一六日、荒川と三島が現地を見て驚いたのだろう。故郷に帰ると言い出した。

大野団長は、引き止めはせず、俺と一緒に苦勞してあそこの土地を開拓してはみようと、思う者は残って頑張って見てくれ、そうでない者に無理にわしから引き止めるわけにはいかない。俺や川尻は年令は若く独り者だったから大野団長と苦勞してみようと残った。と当時の切迫した状況をつぶさにつたえている。明治の末期は、サロマベツ原野の入植ラッシュの時代であった。

西富地区に岡山団体が、武士に青木農場、大成に芝牧場宮城団体、富丘に近藤農場、と続々と団体、個人の入植が続いた時代である。大野団体は、三九年に若佐、中園に九戸入植している。翌、四〇年には若佐に五戸、中園に八戸、と入植が続くが、大野弘と最初計画した五〇戸には達しなかった。

これは、入植地を上川地方など外の地方を選択した村民も多かったこと、外からの入植が相次いで、良い入植地がなくなって来た事にもよるのであろう。

大野団体が若佐に落ち着き、生活基盤の開墾も進んでくると子弟の教育の必要が当面の課題となった。道路の整備なども、国の予算が付くのを待ってはおれない急務であったから先駆者の使命上、自賄いでも、手をかけなければならなかった。

大野弘は、増加する開拓者の子弟が、文盲になっては可愛相だと自宅にあつめて教えた

が、家が狭いので、二間に三間の堀立小屋を部落民の協力で建てた。明治四〇年の事である。自ら教師となり、午前中は教育、午後から、ペンを楯に持ち替えての開墾と、更に団長としての、団体の公的な用件は、常呂町の市街地にあった戸長役場まで徒歩で出掛けるという、奉仕の生活であった。

この時堀立小屋が後の若佐小学校の前身となった。この辺りの事情を、佐呂間町史を引用する。

「若佐地区の開拓は、昭和三九年四月岐阜団体の入植によって始められた。この子弟教育に団長大野弘が奔走し、この年公布された道庁令第一一〇号特別教育規定にもとづいて、



大野団体の1員中原家のあった赤谷部落水没前

明治四一年六月一日沙留間教育所所属第二特別教授所を開設、児童六名の教育を始めた。

校舎は、青木太七の寄付一〇円によって建築されたもので、屋根、壁はヤチダモの皮を張り、板を並べて机の変わりするといった至って粗末な堀立小屋であったが当時はそれが普通で児童は遠く常呂市街から買い求めた教科書をひもときながら勉学にはげんだのである。」

大野弘は役場から貰った拾五円を手にしてこれでやっと教師が頼めると安堵の吐息をもらしたと、娘いとが語っている。

大野弘にとって、開拓とは、原始林と、自然の災害などとの戦いにとどまらなかった。自らが引き連れてきた、あの飛驒の山陰の

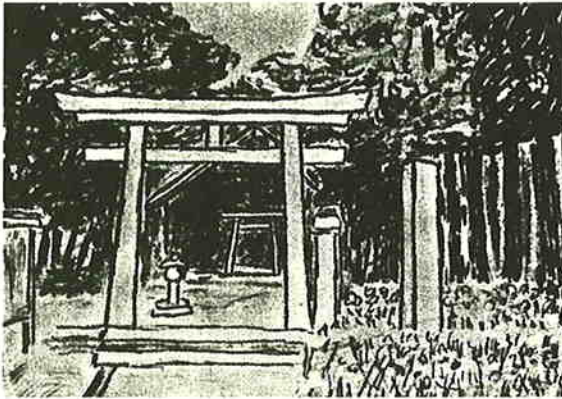
庄川村の里人との暗黙の約束ごと、豊かな第二の故郷の実現であったと思う。

しかし大野弘は、大正に入つて、若佐を去つて親戚縁者の多く移民した上川に家族をあげて引越して行く。大野弘は先駆者としてこの若佐の地でなすべき事を終えていたのか、その事に思いを馳せるとき、明治から大正時代と武士市街地を形成して、栄えたこの地域のリーダーとして実に多くのひとびとが台頭していった事に気づくのである。

それは経済力もある農場経営者を中心に、若佐地区の逸材の豊富な時代であった。

人口も密集し、商店街も賑わい、若佐の全盛時代を迎える創成期であった。

大野弘の使命を託す人々に、堀立小屋で大



赤谷八幡神社寛保元年建てて1741年江戸中期

野から学んだ子弟達もいたに違いない。やがて何処か、ひっそりと大野弘は、若佐を去っていくのである。それが、大正の何時の事なのか、知る人すら居ないのである。
娘いとは語る。

「私の父は、役場の事務員であったが、荒地の開墾は馴れない仕事であったが、父は開拓という仕事は、元百姓であろうと、事務員であろうと心から頑張って希望を持てば必ず成功する。と、いつて、何仕事も一生懸命に努力しました。そして運も良かったとおもいます。」大野弘は上川の地で、成功して、家族にも恵まれ、老後を過ごした様であるが、

故郷の莊川村で彼を知る人は、尊敬の念を抱いて大野弘を讃えている。

「あなた達のおじいさんは立派な方であったあなた達もおおじいさんに負けないような立派になってください。」

大野弘の孫にきた、故郷の桜田郵便局長の手紙の一節である。

大野弘が出立した故郷、莊川村は、九〇年たったいま、北アルプスの影を写す、御母衣ダムの湖底に沈んでいる。

彼の北の大地に果敢に挑んだフロンティアスピリットも、このダムの湖底深く、いまは静かに眠りにについている事であろう。

参考文献 若佐郷土史

(わかさの人々)

山本茂美著

(ああ野麦峠)

莊川村村史

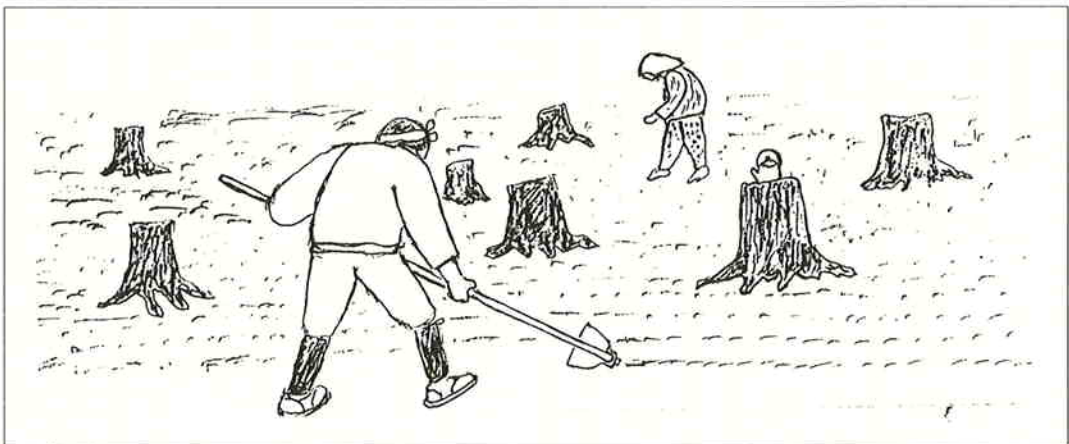
佐呂間町史

語りて 山下 寿一

青木ウラ子

資料提供 徳永 良行

文責 上伊沢 洋



開墾の火入れが成功したら削り蒔きができた (焼畑農法の一つ)